

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 23 回 第 7.2.3.1 節～第 7.3.1.1 節

2018 年 12 月 1 日

小 田 勝

「7.2.3.1 終止形接続の助動詞「なり」の続きから。185 頁の 1 つ目の◆については、北原保雄（1965）の「複述語構文」という捉え方が有名である。なお、これは「妻立てりみゆ」を、「[[妻－立てり]－みゆ]」（「[[妻が立っている] のが見える]」）とみるのではなく、「[妻－立てり]＋[妻－みゆ]」のように、一つの主語（「妻」）を二つの述語（「立てり」「みゆ」）が並立して受けているという構文理解である。旧版では「複述語構文」の名称をあげていたのだが（『古代日本語文法』96 頁、『古典文法詳説』169 頁。ただし図示のしかたは曖昧であった）、山口佳紀（1985:528-532）の批判もあり、本書では特にこの名称をあげなかった。なお、次例は、この句型で、主語が倒置された例である。

- ・天の海に月の舟^う浮^{かつ}け桂^{かつら}梶^{かぢ}かけて漕^こぐ見^みゆ月^{つき}人^{ひと}をとこ（万 2223）

187 頁「7.2.3.2 推定伝聞の「なり」と断定「なり」との識別」。中世には、まれに、推定伝聞の「なり」の前に連体形が現れたと考えられる例がみえるから（§ 1.11）、注意を要する。

- ・心を傷^{いた}ましむるなる^{なる}故宮^{こきゆう}の月^{つき}に（信生法師日記）
- ・また橋^{はし}多く過^あぎぬるなる^{なる}に、「これなん天^{あま}の川^{がは}に侍^{まをら}る」と言^いふを見^みれば、橋^{はし}破^{やぶ}れてその形^{かたち}ばかりぞわづかに残^{のこ}る。（中務内侍日記）

また中世には、伝聞表現として「けんなり」という語形もあつた（「けり＋なり」の転かという。碁石雅利 1984 参照）。

- ・昔こそ吉備^{きへい}の大臣^{おほみ}ありけんなれ。今、粟^{あは}（＝阿波）の大臣^{おほみ}出^いで来^きたり。（平治・古活字本）〈「粟」ハ「黍」ニ掛ケタ洒落〉
- ・大塔^{おほたふのみや}宮^{みや}、京都^{きやうと}を落^おちさせ給^{たま}ひて、熊野^{くまの}の方^{かた}へ赴^{まを}らせ給^{たま}ひ候^{まをら}ひけんなる。（太平記 5）

「7.2.4 視覚に基づく推定」の 191 頁、1 つ目の◆の類例を追加する。

- ・我^{われ}、はかなくて死^しぬるなめり。（蜻蛉）

190 頁の用例 (5) も、この用例であつた。同頁 2 つ目の◆の類例も追加しておく。

- ・歌三首こそ入^いりたらんめれば（歌仙落書）

192 頁「7.2.5 和歌中の「なり」「めり」の用例 (4) の出典は、初刷・第 2 刷に「(李

下集)」とあるが「(李花集)」の誤記であり、第3刷で訂正した。用例を追加する。

・暮れてゆく秋を惜しまぬ空だにも袖よりほかになほ時雨^{しぐ}るなり(続古今 1607)

193頁「7.3.1.1 む」の3～4行目に、「む」が意志と解釈されるとき、主語は必ず1人称である。」と書いたが、これは目的引用の助詞「と」の直前に位置する「む」には適用できない。現代語の「彼は音楽の勉強をしよう^ととイタリアに行った。」(この場合の「う」は「彼」の意志)などと同様、「む-と-動詞」の句型において、「む」が意志を表すとき、その意志は「む-と」を受ける動詞の主語の意志である。

・狐^{きつね}などやう^{やう}のもの、人をおびやかさむ^むとて、け恐ろしう思^しはする^{する}ならむ。(源・夕顔) <「む」ハ「思はする」ノ主語「狐などやうのもの」ノ意志>

・[男六] 太刀を抜きて、入らば斬ら^らんと構^{かま}へて、女をそばに置いて待ちけるに(宇治 12-24) <「む」ハ「構へて」ノ主語「男」ノ意志>

「むとす」の「む」にも、3人称主語の意志を表すとみられる例がある(中村幸弘 2018 参照)。

・宵過ぐるほど、少し寝入り給へるに、御枕上にいとをかしげなる女^をみて、「……」とて、この御かたはらの人をかき起こさむ^むとすと見給ふ。(源・夕顔)

・[僧都六] 年^や老い、病^{やまひ}して、死ぬるきざみになりて、念仏して消え入ら^らんとす。[トコロガ] 無下に限りと見ゆるほどに、よろしうなりて(宇治 4-3)

・「愛宕・高尾の大天狗^{てんぐ}などが、人をたぶらかさむ^むとするにこそ」とて(保元・金刀比羅本)

・[猫またが] やがて搔きつくままに、頸のほどを食はむ^むとす。(徒然 89)

『日本国語大辞典 [第2版]』では、「むとす」の語釈に「すぐに実現しそうな事態の予想・推量、話し手の決意などを、客観的な立場から表す。」(下線、引用者。以下同じ)、「語誌」(3)に「登場人物の意志に基づく動作の描写に用いられている。」とあって、混乱しているようにも感じられる。中村幸弘(2018)は、上例のような「登場人物の意志」を表す「むとす」の「む」について、本来は推量であった(「…だろうとしている」のような意)とみている。

[出典追加] 歌仙落書^{らくしよ}②1172年か③中世の文学『歌論集一』

[引用文献追加] 北原保雄 1965「〈なり〉と〈見ゆ〉」『国語学』61/碁石雅利 1984「『ケンナル』考」『聖徳学園短大研究紀要』17/中村幸弘 2018「『〈…む〉とす』表現の読解と問題点—主体の人称と意志の有無とに注目して—」『國學院雑誌』119-6/山口佳紀 1985『古代日本語文法成立の研究』有精堂